

# 自己理解のためのロールモデル可視化システム\*

石川里佳子 (学籍番号 201021732)

研究指導教員：鈴木佳苗

副研究指導教員：松村敦

## 1. 背景と目的

自己理解を深めることは自己の考え方や行動の判断基準つまり価値観の確立につながる。中でも大学生においては、卒業後のキャリア構築をするために、自己を確立していく上で、自己理解が重要だと言われている[1]。

バンデュラは、“他人を見ることによって、人々は新しい行動をどのように遂行すればよいのかのアイデアを作り上げ、その情報が後の行為のための道標として働く”と述べている[2]。つまり誰かを見習うことによって、行動を起こすことへ考え方や価値観の形成ができるようになる。

この考え方や価値観の形成が自己理解につながると考えられる。この時の見習うべき他者を「ロールモデル」という。誰かを見習うこと、つまり、ロールモデルを持つことが、自己理解をする上で役立つと考えられる。ロールモデルを持つことで、自分の考えや目標を具体的な形で表されるためである。

しかし、個人のロールモデルは、頭の中で考えられているか、自己紹介などで尊敬する人物として示される程度でロールモデルは目に見えていない、可視化されていないのが現状である。ロールモデルが十分に活用されるためには、ロールモデルを可視化することが必要だと考えた。

本研究では、自己理解のためのロールモデル可視化システムの開発とその効果の検証を目的とする。本研究における自己理解とは、自分がどのような人物になりたいのか、他者にどのように認められているのかを把握することと定義した。

## 2. ロールモデル可視化システム「リスペク」

本研究では、ロールモデルを有向グラフとして可視化・共有するシステム「リスペク」を開発した。

本システムには3つの機能がある。1つ目は、有向グラフを用いたロールモデルの可視化である(図1)。これによって、自分がロールモデルにする人物の傾向や自分がどのような視点でロールモデルにしたのかを客観的に見ることが可能になる。そうすることで、自己理解が促進され、目標とする状態[3]に影響が出るのではないかと考えた。2つ目は、ロールモデルの共有である。自分のロールモデルが自分以外の人にとってどのような点でロールモデルにされているのかを把握できるようにする。それによって、自分がロールモデルとした人物の他の面を知ることができ、また、ロールモデルをとして注目されている人物かどうかもわかる。3つ目は、誰にロールモデルにされているのかの可視化である。これによって、自分がロールモデルにされていることがわかると、自分に自信が持てるようになり、自尊感情[4]が強くなることを予想した。

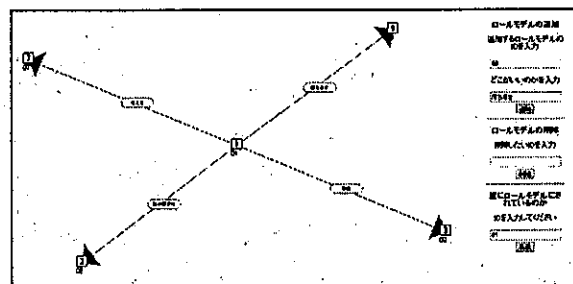


図1 ロールモデルの描画

## 3. 実験

大学生・大学院生 12 名を対象に、構築したシステムを用いてロールモデルを可視化することによる人の意識の変化を検証した。実験手

\* "Role model visualization system for Self-understanding" by Rikako ISHIKAWA

順は以下のように行った。

I. 事前アンケート

II. グループワーク

※被験者間の関係構築のために実施  
課題「電車内の携帯電話のマナー違反をなくす、もしくは減らす方法について」  
・20分で意見をまとめ、1分で発表

III. システムの使用

- ・練習
- ・ロールモデルの追加
- ・他の被験者がロールモデルにされているのを見る
- ・被験者がロールモデルにされているのを見る

IV. 事後アンケート

#### 4. 結果と考察

実験で明らかになったのは次の3点である。

目標とする状態が変化しなかった被験者が7名、変化した被験者が5名であった。変化した被験者の1人は、実験前の目標とする状態が「要領の良い人間」だったが、実験後「落ち着いて考えることのできる人間」に変化した。この被験者は、実験を通して、落ち着きのある人をロールモデルとして設定していた。ロールモデルを設定したことが自分の目標の変化に影響を与えたと考えられる記述になっていた。

システムを利用して他者の知らない面に気付いた被験者が5名、気付かなかった被験者が6名であった。気付いた被験者の中で、2名はロールモデルにした人の他の面を見たとアンケートから読み取れた。他者の人を見る視点を知ることにより、ロールモデルの他の側面を見られたのではないかと考えられる。

自尊感情は、4名が向上、7名が変化なし、1名が低下という結果になった。自尊感情が向上した人は、ロールモデルを設定したことが目標の具体化につながり、自尊感情が向上したのではないかと考えられる。自尊感情が低下した人は、ユニークネス尺度[5]が高い値を示している傾向にあった。自分のことを他者に把握されることによって個性的でありたいという思いが侵害されたと感じた人がいた可能性がある。

#### 5. おわりに

本研究では、ロールモデルを可視化・共有する効果に着目し、有向グラフによって個人のロールモデルを示すロールモデル可視化システム「リスペク」を開発した。

本システムを用いて、自己理解に対する影響を検証するため、システムを利用して実験を行った。その結果、ロールモデルの可視化・共有によって、他人や自分の認識が変化する被験者や、自尊感情が上昇した人が存在した。

本研究によって、個人のロールモデルを可視化・共有することによって、自己理解に変化を及ぼすことができる可能性が示された。今後の課題は、ロールモデルを設定しやすくなる工夫や、実際の学習・行動につながるような仕組みを導入することである。

#### 文献

- [1] 西村純一, 平澤尚孝, 福本俊, 堀田千秋, 佐久間香子, 吉田滋子, 井島由佳. 物語論的自己分析ツール作成の試み: 女子大生のキャリア支援のための基礎的研究. 東京家政大学研究紀要. 2011, no. 51, p. 79-86.
- [2] A. バンデュラ. “人間行動の特性”. 社会的学習理論: 人間理解と教育の基礎. 原野広太郎監訳. 金子書房, 1979, p.25.
- [3] 小平 英志. 理想自己・義務自己への意識傾向の測定: 自己目標志向性尺度の作成. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 2001, p. 283-289. <http://ci.nii.ac.jp/naid/110001033871>, (参照 2012-01-18).
- [4] 山本真理子編. “自己.” 心理測定尺度集 I—人間の内面を探る「自己・個人内過程」—. サイエンス社, 2001, p.26-31.
- [5] 吉田富二雄編. “動機付け・欲求.” 心理測定尺度集 II—人間と社会のつながりをとらえる「対人関係・価値観」—. サイエンス社, 2001, p.88-91.